



南嶽叢書

東海談

前集

5
40



字義よく為とラレ、と訓ト被とクノと訓トくも義理ハ
通じたるあり為の字とせしめらるる所の字見の字と用由
へ一世の大儒をせしめり誤りしあはる仁齋先生の所謂
妄填といふことを謂ふべし

此方の文人云々のこととていふもさういふも東鑑職原
等に安よさるることとていふもさういふも胸があはく
ありて頭痛をぬき此二書のことあり玉海中右記
園大曆等も皆物り延喜年中より文章漸衰へ
保元より至く壞亂極ぬ

歎ハ却きものの母の心を和らして北條氏が初よび
刑をゆるぐせしむ愚ある即是非とも天朝よ背くハ
何ぞ一首の歌は狼狽するかの大事の敵を宥む
武士の道を教ふるが故あり其大物を失
あは

人は可きこととて死し笑ひきくこととて死し負ふ
死し鞆があはりこととて死し難人のまにからん
くこととて死し色に溺れ死しとて死しとて殺し
仁とあはれとて死し命の惜まざる

方平記の後醍醐天皇御謀叛の事とて一ハ文盲
千万ある能者なり

川の浦はありとらぬむかひの事なりとて一ハ
田舎ありとて一ハ浮き干潟ありとて一ハ助字あり
ありいしむとて一ハ繩とて一ハ無の字あり流の浦
ありとて一ハ干潟の無ありとて一ハ田舎ありとて一ハ
乃方ありとて一ハ片田ありとて一ハ長き誤ありとて一ハ
乃人の誤ありとて一ハ同音に誤ありとて一ハ萬事集とて一ハ
乃人の誤ありとて一ハ同音に誤ありとて一ハ萬事集とて一ハ

措申急旨故実と失らぬことなり

播磨のありとて一ハ古事記の赤名と書しとて一ハ國史に
ありとて一ハ風物ありとて一ハ地名ありとて一ハ後世の
おぼろしきありとて一ハ風物ありとて一ハ地名ありとて一ハ
續鼻禪とて一ハ古事記の赤名と書しとて一ハ國史に
上總の人ありとて一ハ古事記の赤名と書しとて一ハ國史に
強ふありとて一ハ繁華の地ありとて一ハ次第ありとて一ハ
ありとて一ハゆきとて一ハありとて一ハありとて一ハありとて一ハ

頭ひらぎともさうは昔の節々の赤鯰の皮を用ひ
くもや 濱鯰イハシの頭を用ひ何れの時よりぞとせしむ鯰ハ
今江戸の人あらうとらひ或はきをあらうとら

法皇号ハ佛家にてハミ上の佳名ともよへられも天下の
上萬民の長くより歡喜をあまり佳名ハあはれ持子
ら削道鏡と法皇と号せしより遂に上皇の御名ハ
ある院号の起る崩と胎ハと謂ふべし只方上天皇
方上皇上皇仙洞ありすともさうとてさうありとせし
佳名あり

論語の註ハ何晏集解皇侃疏義を用ひし明經道

乃故實として 天朝まてふかひそとれとす京師

遊學せし時美京韶光卿勅解由小路子邂逅せり存上り

皇侃が註し論語あり予皇侃と文字の経く

んと語けしを卿曰くんんんんんんんんんんんん

と語しを明經家也故實あり山東の學者ハ

語法を勤めんとて天皇とてんんんんんんんんんん

逢坂より東と関東と云宮根よりあり
山東といふと同なりとて口語あり

地形とらあり漢書漢書あり

漢書 按圖書觀地形

駟馬之家不恃雞豚之息伐冰之家不恃牛羊之入
 韓詩外傳子思子云子思子由之視也大學の書
 子思子の書と看よ仁齋先生の大學の孔氏の遺言
 あらばとりきりて五百年來の活眼あり書と評
 活眼といふ看よ活眼といふ看よあり其明德辨
 ハ定本子思子の書と本文と朱註との相違をみる
 氷炭お容れざるに似たり東涯先生明德朱註辨
 載之熙朝文苑あり請續く能看の
 稱唯とおちやるとよみ定考とらるる也とよみ賑洽

とよみかるとよみ明經道の故実あり
 東都の一老儒あり肥後侯の歳且の詩を賦せられ
 一と和せり其題曰奉和肥後侯拾遺大牧伯高
 韻と書きたり嗚呼と何とらるるど先とと心と
 て看よ肥後侯といふ一國の王あり拾遺ハ侍従の
 唐をめて官人あり牧ハ州牧をて國の守あり伯を
 五等ハ諸侯の爵あり此様は四五人と一は混と
 りけり何れぞや侯とらるる拾遺牧伯と評
 侯とらるる人の面目形とらるるや
 梅洞林子僧玄光
 水戸侯の招に應

て詩と賦と遊水戸侯園池と書くはよくみ体と書くはよくみと云ふべし
 今の儒者ハ玄をまよくぬきよく電燈の遠より望みしやうと云ふべし
 又大のらふと安子用と云ふはよく禮と云ふと云ふはよく禮と云ふはよく
 僧鳳潭が萬國掌葉圖の跋に大扶桑と書くはよく笑言
 乃其書と云ふはよく佛書に大阿羅漢大弟子と云ふはよく大の字
 安よ其通を張皇せんとして大の字義と云ふはよく笑言
 大宰純の著りし修刪阿弥陀經の凡例に詳に論
 ぜんと云ふはよく大扶桑と書くはよく笑言のハ小扶桑と
 いふ國ありしと云ふはよく但日本紀に大日本と書くはよく
 倭也と陰山源七が朱明一統志の跋に大日本と云ふはよく

大扶桑と云ふはよく笑言のあり大唐大明等は大ハ大小
 乃大ハ非ど何と云ふはよく小唐小明ありしと云ふはよく大伯
 大ハ羽の大ハ同じ 或老儒の曰大のらふと國を冠す
 たる我日本の手柄なり故に朝鮮ありて大朝鮮と書
 たるハ扶桑あり中國より聽ナルキたるハあり豈東方の光と
 あらざるや予答曰天地乃同万国の中獨立して國と
 建て中國の臣とらざるハ万国の知る所あり故に其國
 向く聽ナルたるハ外聞を拘るハ昇劣心はありざる唯
 朝やと云ふハ秋の雅ありて從らる何ぞ必しも大月氏

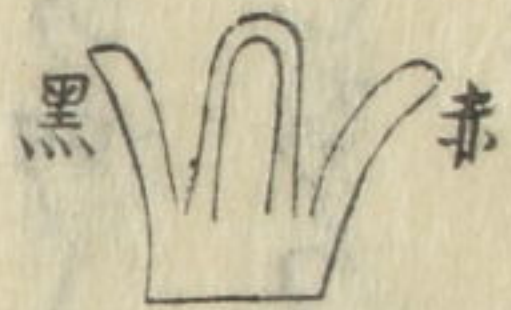
の名と字の人も幸ふ大和皇和の名目ありと大日本と
りつよまきらざらや

源氏物語の辨百廿四卷中院也是軒と源多孝
とありて編む一書ありとて此書と造就せん
とて書籍と多く集め一句一言此物語は因涉する
とてむき披華せらるる世にけり岷江入楚五十
四卷
あり物語を入楚ハ辨を編む者ありて草稿ありと
辨ハ多孝とて世にけり世に出でて入楚と
多く人同に流すは岷江入楚ハ本名濫觴無底

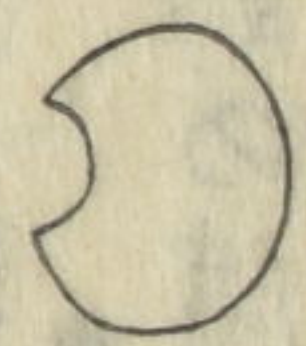
按人一首詩
云
示源通勝
後陽成院
旅雁北飛
殘鵬天今
宵話旧思
欣然前身
蘇武去來
否一瞬居諸
十九年

抄と名づく此二つの名は孔子家語より出されども
世是軒ハ山谷が岷江本濫觴入楚乃無底とて詩を
名づらむとて中院姓多孝名通勝とて
藤孝ハ細川幽齋あり丹後の田邊の郷に居りし時
あり通勝卿ハ此時天譴を承く田邊とて難居らる
る十九年との再徴とて時天皇御製を詩と
賜し通勝卿芳韻と和しとて載く一人一詩あり
紙屋川ハ北野菅廟の後を流す溝あり俗間とてこれを
かい川とてかえり川とて流りあり昔仁和川の縮紙

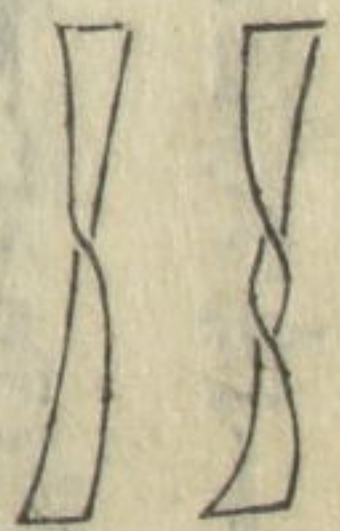
の形と少いく刻み模をーと津村氏と務ーと字を



心 挂



純 二 渾 三



繩 久 加 十

右の形の名目江家次第より板本に加え繩と
加之繩と誤り書り之の字と久の字は改むべし

上加茂の神社ハ瓊々軒尊とまつりト加茂の神社
神武帝とまつるは社家秘ありト山崎加茂まつが
改元考に書ありト一トより世の人とあるよりと改むべし

神社考 神社便覽 和字雅諸社一覽等乃誤ハ用由
べし

細き竹の子とらぐこりふ吉々著聞集に石泉法下
鞍馬の別當よりかこらむとらぐとらぐとらぐけられ
しとある人の許ハもらこらとらめ

いざむらからまれ福とらむとらむとらむとらむとらむ
あるべしとらむ少説子給中とらむ氏ハ武内の齋ありとら
け美少考とらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむ
とらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむ

あるを——とらふ事ハ赤城山の昔を話かり未練乃
 字者れ假字のかぎを樂しむ可成談と改め名づけ
 一ハさし——文盲形と字者有る如と其鉄面と云々
 云々あり又奈流邊志と云々ハ江文盲千方ある僻字
 う如き——あぐ——言ふも遠——江戸も遠——とて遠あ
 あ——に云らつ——様形半塗の字者ハやもそれと云
 誤多——ち二十字あり内ハ二千笑と云と讀まひを何
 るも疑り——まのあり其先入の疑り一生の病と云
 かく——圓機活法と赤城山服元高々大俗書あり

視るものありとらふ如く——く——を發破無益の言
 あり——とて俄に拂ひ——のよらるやら下本なきやら
 狼狽まり——とてお——く——とて未練の字者ハあ
 めく——とて詩学大成と改め書好むハ限——とてわつく
 材本と引出と字者ハあ——とては拙きをまて一生机
 ぐ——ありとてあ——のあり相乗るの——ハ如何服氏
 ぐ——如何とての如く——とてま——とて可笑く出
 底倒——とて書とて讀さる——とてけの——
 ちよらるの曰或説子暗部ハ鞍馬の一名あり又或説

其れ類しき斯くもく斯くを能くあり
 或ふのちかつてのいひゆるもといふらねしは近きの人
 といふ此のち子伊藤源佐が門人某を扶持してかえ
 るてしりし事ありれを世を新く利便のこまめかづのこ
 ろのいひのさかすまありて周斎派の徳者を世にひき
 出さしめ同いものも新く初より四書小学近思録
 朱子文集語類性理大全等の眼をまじり且又静坐
 工夫の形ありくいひかつてのこまめかづと理細のこま
 めかづといふしぬ四字ゆきて曰く子信者なりといふもの

用よまぬもの外世よの書るもの中子信者の縁をせり
 りど費ありぬのあらざるとは天註しは充ちぬるあり
 凡そ学者の徳法は神書も佛書も聖書も徳をけけおほし
 乃 類まが澤山と諺く入用次第あり九出とて好ま
 きなりあゆむしは四書五經ありていふとてとていふ
 とおとせおの用よまぬものり細川迷齋の学問を
 乞ふればこれ様よりるよりあつてありしなりしは
 入用よまぬく使しとのものりしりあひの言
 せしらん

漏れぬ利に字の者、お初の下字をさし、おこまの字を讀て
 もいふまゝにわらふかと讀ても同じにふまゝにいふまゝに
 大なる誤りありと文の字は傳及といふやあるとさすはれ
 一生の字道の甘味にさるるやあるまじく或は筆傳乃
 佛經を傳ふしと傳にたぐ聽ふりし出入の二字
 とさしめしと讀しを章以爲此傳必定讀中らまき方
 引さく出とま聲母とありとらん其經をわけて音
 とふまゝに入聲母に讀むしとあり出の字を去聲ありと
 いふすと讀み入聲ありといづると讀ゆが上下乃

文義とつ味して讀むるやと讀らぬを彼傳曰
 志申らぬと讀み難きをさしめしと讀むといひ
 とさしめしと讀むもつとさしめしと讀むも同じ
 りとさしめしと讀むの字の者と同じに讀むるや
 菓子の菓ハ艸冠とありしと正字ありし本草に果ハ
 他も因果の果と讀み解しをさしめしといふ訓とさし
 菓の字の地とあらん
 斯波の三田と渡邊源二綱が住り地ありといひ其示
 のハ幡宮を綱が守神といふ大なる誤りありと綱が

何一不其田といふ事にて世を本庄の事あり
其所以其田八幡の初ありと六孫王經基其田
吾らとて子國史よ見えたり物とて其田源二綱と
經基とて其田より屬せしあらん

本田善光といふ人の開闢以來いふ事と出せせざる人あり
が何物の授けが寓言せしや善光寺よ因とすし
と設けたりとらの名に因と善光寺と設く浮屠民
の世と欺く毎と物あり多し一殊受たるその境内
善光寺の傳と設きて經と撰手段とせり物

とも文盲人の傳り傳りし事ありて時代の人の名の
付掃とて此時代より名ありしなり一猿樂乃
古曲は古人を稱しは傳り狂言といふ名目ありは
異論なり一天地未だ生むる人と傳り出ら其た道
乃罪最甚し一佐野源九郎常世といふ人も寓言
ありと知人あり一和漢三才圖會下野州大平権現
は佐野源九郎と祀るとありこれかありや字あり
りありとありし此掃のりありしを後世の人ハ
往古とてその辨らし

へみり見
云々ナリ
ノリサケ
ノ字方
トイハル
カニフヤ

のあやありの章ハ濁江に從ん

すも川を南田川とも書き隅田川とも書ゆはる風物

あらぬ名あるべしと云ふ伊勢物語に墨多川と書

徂来書の墨多川と云ふは墨水と名づけらるるハ古

遠くとも云ふべし

地名のつくれある中華ハ言ふや及ぶ次子朝鮮と安南

との此二國はよく中華と云ふもありと云ふは

あらんや名字稱号の正き此二國は及ぶやある此二國を

のどくおはれと云ふ言と謂ふべし

徂来公の孔子畫像の賛に曰是謂克肖吾豈敢

是謂不克肖吾豈敢亦唯唐帝之賜袞冕十二章儼

然王者服萬世之下萬里之外伏惟聖德遠矣哉癸

卯之夏日本國夷人物茂卿稽首拜手謹題此夷人の

二字看官の如何と云ふ其評を聽ま

予を以て萬國を看る人品行俗好ハ朝鮮と琉球

との其人情行跡ハ論ども衣冠職名俗を以て其

儼然と云ふ美きやと云ふ一強又朝鮮ハ先王の道中華

よりら縁を以て傳へるるを以て視悟淡よ能きを

つて村夫子陋和尚の見解あらん和護此法正訓
あり義訓ありあつらんあつらん

世俗れ所謂のまづのまづの字ハ萬葉集ハ葉の字
を判らざる假字あれども意あり正字ハ何れ
とらる當の字あり水滸傳ハ該の字あり此るハ
まづと書けりあり但一俗語あれども月ひらけぬ
るありまづ雅文ハ當の字まづと云方諺ハ譯ハ
あり

見らるるありまづまづあつらんあつらん

ふありてもあつらんあり聞ハまづまづありまづまづ
まづと讀まづまづあつらんあつらんまづまづあつらん
見聞と對と觀ハ熟とまづありまづまづあつらん
讀まづまづ字ハ通じまづあり聽ハ熟とまづあつらん
秋聲賦ハ方夜讀書ハまづ何れと聲ハ西南
のまづ自意ハ者あるが聞えまづあつらん
聽ハ書ハ文と看ハ聞と聽ハ字義まづまづあり
故ハ見聞と對とまづまづ見聽と對と觀聽と
對とれども觀聞と對とまづ讀唐人の俗語とまづ

一と聽する曰孔子ハ一箇の仁の字を説き孟子ハ
仁義を對して説き孟子ハ孔子より賢き人
不ありと講ぜらるる如し倫事と云ふは其の
を説きしや如此の倫事といふは其の
なく一生儒者ありまれば其の
乃幸と謂ふべし

猶の字翻譯してはるごとく猶^{ニサライ}實^{ニトイ}猶^{ニトイ}遠^{ニトイ}を敬つべし
物とせし人^{イキ}の意を用ゑ誤あり

婦の稱い^{イキ}が稱あはる富士の峯甲斐の峯の略語

あり西行法師が少お中山より
みしとらる甲斐の峯と小おの中山より望^{ミル}とらる
あり頭巾氣象の教人よりが根と誤る山の根
のふとせハ笑へしこれとある武藏根とあら
りや

黄栢ハ黄檗^{檗音栢}ありむくの葉を説きとよむ物

黄檗山と云ふ本音によむは山と云ふは
世間よりいふれしをあるは祖意の中華の人
讀書^{スリキガク}と云ふは^{ミヨ}看書と云ふは

あらんや

花のさくさくの字ハ開の字あり日本紀ハ木花開耶姫コハナカキヤヒメあり

華とさくさく野華とさくさくはまがらふとさくさくハ判の字あり世俗割刻等のらふと用ゑ誤ありと

盃とさくさくとさくさくハ擬の字あり

東國通鑑の序ハ文字の位置を顛倒せる誤あれども

人リまじ視ミツクざらふりまじ

東國通鑑ハ朝鮮國の史記あり順化王の朝鮮を征せられし時多ク彼國の書と多ク似たり中ハ此書全部あり一ハ此方より翻刻あり其後彼國よりハミ績といふ新ハ搦りて野ハハあり全部五冊あり

吉野拾遺四巻編者ハ名を逸して南朝の王人のまふ

出とて由鵝峯文穆先生の序あり坊間板切の書ハ

序形一櫻雲記三巻是ハ南朝の日記あり

摺ハカ合之流二切折也譯しておはと誤搦ハ他蠟都

盃二切打也譯してすはと誤此方の入此と字とより

ちがと誤用とより久一摺ハ書翰あど六摺七摺とる

おは也書翰式をを觀つて搦ハ本州綱目抽の條下

ハ打碑とつらりてとより即すはとよむ抄とつらり

石搦とさくさく當りて石搦と書ハ誤あり此種あり

ハ早卒イナハク改るがよー世方のより繁き誤りと初く改めど用
るのの行字古使と行李と誤るゝ合点して常法ある
りあれども搦摺の二字ハ遠慮ありに改るが
乃ホの字とあぶと讀ハ誤りあり條の意どありあは
枝のえごもあはゞ此方の人花一輪二輪ありよと
華人ハ花二朵二朵よりよきハ長崎譯官彭城氏サカキが語
子聞也

和歌の詞書と前書序あはゞ唱へるごと詞書と
べー或名家の人床の掛物よ古筆の和歌ありし其
詞書と前書とさく存中の人よは天ゆめ

倭漢三才圖會の倭の字とゆめユメ何和の字と
書ゆめや中華の人ハ北狄と罵るゝ羞奴と呼め我が
の人と弄て倭奴と呼羞いけああり此に對せる倭奴
あり但集おの譯字ハ和の字と用べーと誤るゝ
皇和と用ゝ登明の自贊ありゆめども倭の字のありき
とりゆめ鶴山野義卿名ハ節族ハ人見
表字ハ友元但集おのサキナは
登明とらゆめり皇和と用ゝり仁齋先生の自筆の
写本ハ逐一皇和と書ゆめと堀川の氷哉閣みく視

傳の室細末^{キキ}先^{キキ}の^{キキ}あ^{キキ}は^{キキ}や師匠より^{キキ}らる^{キキ}學者
如此^{キキ}より^{キキ}と^{キキ}ば^{キキ}あ^{キキ}る^{キキ}あ^{キキ}る^{キキ}ら^{キキ}ら^{キキ}あ^{キキ}る^{キキ}あ^{キキ}る^{キキ}は^{キキ}は^{キキ}は
師匠より^{キキ}らる^{キキ}れ^{キキ}不^{キキ}可^{キキ}あ^{キキ}る^{キキ}の^{キキ}を^{キキ}あ^{キキ}め^{キキ}べ^{キキ}し

東海談下編終

南畝叢書

前集三十部

後集三十部

嗣刻

寛政元年己酉冬十二月

東都書肆

小傳馬町三町目

小酉堂遠州屋清右衛門梓

